

今日は、欠席者数はそれほどではありませんでしたが、保健室来室者が多くいました。運動会が終わり気が抜けたのか、目標がなくなったのか、体の具合というよりも気持ち・気分が乗らない子が多かったようです。ご家庭でじっくりお子さんに向き合って話を聞いてあげてください。



家庭と学校ががっちり手を繋ぐ2年目に

## こんな見方で、子どもたちと関わることができたら素敵ですね

5月の育成委員の巡回記録簿に、こんな素敵なコメントがありました。

「『おかえり』と言うと元気にあいさつしてくれる子、モジモジする子、ちらっと目を合わせてくれる子、思春期真っ盛りな子、いろんな子どもがいて旗当番はおもしろいな~と思っています。あいさつができる子もできない子も含め、それが良い悪いではなく、皆、个性的でかわいかったです。子どもたちから、今日もたくさんの元気をもらいました。感謝。」



そもそも、「子どもたちは、一人ひとり違う」という大前提を、私たち教員も親もわかっているはずなのに、子どもたちを見るとつい比べてしまっていないでしょうか。「いろんな子どもがいる」のが当たり前。兄弟や姉妹でも、一人ひとり違うのが当たり前です。

「良い悪いではなく」、一人一人が違った個性を持っているという見方をすることで、その子をプラスの視点から捉えることができるのではないのでしょうか。

「子どもの見方」について「一人ひとり違う」という見方とともに、「減点法ではなく加点法で見る」ということも大切です。子どもを見るとき、どうしても減点法で見ってしまう傾向がないのでしょうか。

減点法は 100 点満点が先にあり、間違う度・できないことがある度にそこから点数を引いていく見方・考え方です。朝のお子さんの様子を例に考えてみます。

- ・朝起きるのが遅い
- ・ご飯を食べずにボーっとYouTubeを観てる
- ・準備はノロノロ、遅刻しそう
- ・宿題をやってなくて焦ってパニック



これに対して、加点法は、最初から 100 点があるわけではなく、ここまでできたら・これできたら何点というふうに、よい結果やそのプロセスを積み上げていく見方・考え方です。

同じ朝の様子を見ても、

- ・遅くても朝起きた
  - ・ぼけ~としながらも朝ごはんを食べた
  - ・ゆっくりでも準備した
  - ・「宿題しなくちゃ!」という意識はある
- という見方・受け止め方が加点法です。



減点法だと、できていないことに目が向いてしまい、それをイライラした気持ちで伝えることになってしまうため、言われた方は「やろう!」「頑張ってみよう!」という気持ちにならず、どんどんできなくなる方向に傾いてしまいます。

その一方、加点法では、できていることに目を向けて声をかけていくことで、子どもの心のエネルギーが徐々に満たされ、やる気と自信が引き出され、次の行動に対しても意欲的になります。結果としてできることが増え、新しいこと・未知のことにもチャレンジする気持ちが増えます。



また、人間の特性のひとつに、周囲の人が注目した行動があると、その頻度を増やす傾向を持っています。注目された・言語化された行動を増やすのが人間の特性です。

「〇〇ができたね!」と笑顔で伝える場面を積み重ねていくことで、徐々に、言われなくても自分から取り組む姿が増えていくのは人間として当たり前の反応・変化だと言えるわけです。



ちなみに、減点法で他人を見ている人は、往々にして自分自身のことも減点法で見ていることが多いようです。

自分自身の子どもの見方はどうでしょうか?